

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12379

研究課題名（和文）戦国秦出土資料を用いた上古中国語声母体系の再構

研究課題名（英文）Reconstructing of Old Chinese initial using Qin excavated documents

研究代表者

野原 将揮（NOHARA, MASAKI）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：80728056

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は戦国時代前後の秦出土の文字資料を用いて、上古中国語の音韻体系の研究を進めることである。21年度には、秦簡のうち、雲夢睡虎地秦簡、周家臺秦墓簡牘、嶽山秦墓木簡、天水放馬灘秦墓簡牘、[カク]家坪秦墓木簡に見える通仮字を整理し、その成果を報告した。その他の資料に関しては継続して整理しているところである。

また秦簡に加え他の周辺地域の資料を加えた内容のものを学会報告、雑誌論文を発表している。秦簡の中では特に睡虎地秦簡、里耶秦簡、岳麓秦簡を用いた成果を発表している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術論文は言うまでもないことだが、資料として「特集 秦簡牘通仮例」（『センター研究年報2021』、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター）に通仮例を公開することができた点は学術的、社会的意義があったことと考えられる。その他の通仮例については順次公開する予定である。

研究成果の概要（英文）：This research is to study the phonological system of Old Chinese using the Qin excavated documents around the Warring States period.

In 2021, we sorted out the phonetic loans seen in the Qin excavated documents, as follows: the Shuihudi Qin slips, the ZhoujiaTai Qin slips, the Yueshan Qin slips, the Fangmatan Qin slips, and the Hejiaping Qin slips. As for other documents, we are still working on sorting them out. We will publish a new list of phonetic loans in the future.

Besides the list of phonetic loans in Qin slips, we have published some articles on reconstructing Old Chinese using the Suihudi Qinjian, the Liye Qinjian, and the Yuelu Qinjian.

研究分野：言語学

キーワード：上古音 出土文字資料 方言

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで報告者はおもに戦国時代中期～後期の楚地(長江中流域)から出土した戦国竹簡(いわゆる楚簡)に見える通假(音声的近似による当て字の用法)を整理することで、上古中国語

特に戦国楚地の上古音の再構を行ってきた。戦国楚地の通假例を元に再構した音系と传世文献に基づく音系では、文字が一体どの単語を表すのかという文字と単語の配当関係(用字習慣)がやや異なるものの、音韻体系という面ではそれほど目立った差異は見られなかった。

一方、楚地と同様に、戦国期～秦初期の竹簡および木簡は秦地からも多数出土しているものの、これまであまり扱うことができなかった。そこで本研究では戦国～統一秦前後の出土文字資料に見られる通假例を対象に、従来の研究と同様の手法で上古音研究を進めることとした。これが研究当初の背景である。

2. 研究の目的

戦国時代～統一秦前後の頃の上古音の研究を進めること。さらに関連する問題、たとえば文字の用字習慣、びん語(Proto-Min)、ミャオ・ヤオ語(Hmong-Mien)との関係について検討を加えること。あわせて上古音研究における重要な仮説について検証し議論すること。

3. 研究の方法

これまで上古音研究を進める手法として、これまで大きく分けて3つの方法で取り組んできた:(1)伝統的な手法、(2)出土資料を用いた研究、(3)びん語や周辺言語との比較。

(1) (3)についてはこれまで通り、研究を平行して進めるが、(2)については、従来は楚簡を中心としていたところを秦出土の竹簡・木簡にする。利用する用例は通假(音の近似に基づく当て字の用法)であるが、義通換読(同義換読、訓読)のような例も研究対象とする。これは通假と見誤って再構する音体系に影響が及ばないようにするためである。

4. 研究成果

「個別語彙の再構について」:

2018年度には「泉」の上古音について検討を加え、国際会議で発表している。そもそも「泉」は中古音以降では合口であるにもかかわらず、上古音(文献に基づく)とびん[門+虫]語のデータによると、開口(非円唇母音)に由来すると考えられる。この開合の扱いが上古音再構に関して研究者間で異なる。本研究では「泉」が上古において非円唇であり、同化もしくはContaminationが生じた結果、合口化したと結論づけた。その同化もしくはContaminationが引き起こされた要因として、「泉水」のような複合語の存在や義通換読(同義換読)によって「泉」と「原(源)」の読み替えが頻繁に行われた結果であると考えている。当該研究の成果は雑誌論文「構擬“泉”字音—兼論“同義換讀”」(*Bulletin of Chinese Linguistics*)として発表している。

②「少」の上古音再構に関して、野原(2015)「少の上古音再構について」(『中国語学』262)で残された課題について(声母が異なる少と小の通用について)、義通換読という視点から検討を加え、「少」の上古音再構—義通換読から見た上古音再構」(『中国文学研究』)として論文として発表。「少」と「小」の関係を通假とみなす研究者は少なくないが本研究では義通換読の結果、「少」と「小」の通用が生じたものであるとした。

③2019年度には“egg「卵」”の上古音 特に声母と円唇母音に関して検討し、International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (ICSTLL 52)で発表。传世文献やびん祖語(Proto-Min)、ミャオ・ヤオ祖語(Proto Hmong-Mien)、Kra-Daiによると、*Krのような二重子音を再構すべきであるが、実は出土資料や传世文献からも同様の痕跡がうかがえる。たとえば秦簡では「卵」に「luan2(漢字が表記されない)」が付加される例が見られる。以上の例を根拠に*K.r.という声母を再構している。「卵」に関する論文は2022年に雑誌論文 Old Chinese “egg”: More evidence for consonant clusters (*Language and Linguistics*)で発表。

2022 年度には「訊」について漢簡と秦簡に見える用例を整理し、その多様な意味の変化について検討を加え、国際シンポジウムで発表のほか、学術論文として『《漢簡語彙考證》訂補(四) —“訊”』(簡帛網)と発表。

④また里耶秦簡に見える文字と{稻}に関する研究も国内のミニ・シンポジウムで発表し、論文は Bulletin of SOAS に採択済みである。ミャオ・ヤオ語(Hmong-Mien)からの借用語と思しき{稻}について、里耶秦簡に見える「𪛗」と Proto Hmong-Mien の *mbləu の関係から検討を加えたものである。「𪛗」が North Hmongic もしくは East Hmongic の rice plant と密接に関係あることを指摘したものである。

⑤このほか、否定詞「非」の上古音の字音について、国際ワークショップで発表し、雑誌論文「略談“非”的上古音及相關問題」(『雲漢』)として発表。「非」は上古の微部に相当するが、主母音が円唇母音 *-ə- であるのか、または非円唇母音 *-u- であるかが定かではない。当該論文は古文字、方言、縮音等の面から検討を加えたものである。

⑥また {dog} を表す語彙に関して、国際共著として「説{狗}」(『岩田礼教授栄休紀念論文集』)を発表。

以上が個別の語彙に関する再構である。個別的な語彙の再構であるが、いずれも上古音の様々な仮説や重要な現象と関連のあるものである。たとえば①は円唇母音仮説、②は義通換読(同義換読)と L-type hypothesis、③は円唇母音と二重子音、閩語の来母の摩擦音化、上古音の借用語、④と⑥は借用語、Hmong-Mien の関係、⑤は円唇母音、縮音に関わるものである。各語彙の上古音再構を通して、上古音の様々な仮説を検討したものである。

このほか上古音の研究方法について、2020 年に台湾聲韻學會で発表、ロンドン大学 SOAS で開催されたワークショップ(Recent advances in the study of Chinese rhyming practices in excavated documents)で安徽大学所蔵の戦国竹簡に見られる通假の例について発表、台湾国立中山大学で開催されたシンポジウム(「舊語新知：古代經典的語言新釋」)で二重子音 *K.r- に関して講演、浙江大学のシンポジウム(「語言学前沿与漢語史研究講壇」)で愛媛大学の秋谷裕幸教授と講演し、学術論文「びん語中来自 *m.r- 和 *ng.r- 的来母字」(『辞書研究』)で発表している。当該研究は Proto Hmong-Mien と Old Chinese、Proto-Min、さらに Early Chinese と Onset の *m.r- (もしくは *mbr-) について論じたものである

また 2022 年度には Workshop: Chinese languages and its surroundings を開催し、漢語とその周辺の言語に関する発表を国内外の研究者を招いて開催した。

秦簡を整理したものとしては、『センター研究年報 2021』「特集 秦簡牘通假例」(京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター)があり、秦簡のうち、雲夢睡虎地秦簡、周家臺秦墓簡牘、嶽山秦墓木牘、天水放馬灘秦墓簡牘、[カク]家坪秦墓木簡に見える通假字を整理し、でその成果を報告した。当該書で取り上げた通假例はすべて陳偉編『秦簡牘合集(壹)(貳)(參)(肆)』に見えるものを採用している。その他の秦簡の用例についても現在整理を進めており、将来的に公開する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 秋谷裕幸、汪維輝、野原将揮	4. 巻 上
2. 論文標題 説〔狗〕	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩田礼教授栄休記念論文集	6. 最初と最後の頁 264-280
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5281/zenodo.6342364	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 野原将揮	4. 巻 2021
2. 論文標題 秦簡牘通假例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 センター研究年報2021	6. 最初と最後の頁 1-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 野原 将揮	4. 巻 19号
2. 論文標題 音韻をしらべる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 漢字文獻情報処理研究	6. 最初と最後の頁 155-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 野原 将揮	4. 巻 0
2. 論文標題 研究上古音：證據與蓋然性～以“少”字音為例～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第十八屆國際暨第三十八屆全國聲韻學學術研討會論文集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野原 将揮	4. 巻 12
2. 論文標題 構擬“泉”字音 兼論“同義換讀”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Bulletin of Chinese Linguistics	6. 最初と最後の頁 74～87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/2405478X-01201004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 秋谷裕幸・野原将揮	4. 巻 1
2. 論文標題 上古唇化元音説与[門+虫min3]語	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国語文	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 44
2. 論文標題 「少」の上古音再考 義通換讀から見た上古音再構	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国文学研究	6. 最初と最後の頁 66-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 1
2. 論文標題 略談“非”的上古音及相關問題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 雲漢	6. 最初と最後の頁 34-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nohara Masaki	4. 巻 24
2. 論文標題 Old Chinese 'egg'	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Language and Linguistics	6. 最初と最後の頁 325 ~ 344
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/lali.00133.noh	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 秋谷裕幸・野原将揮	4. 巻 5
2. 論文標題 びん語中来自 *m.r- 和 *ng.r- 的来母字	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 辞書研究	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 28
2. 論文標題 構擬上古音 *Kr-: 以《安大簡》「LUAN」為例	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 聲韻論叢	6. 最初と最後の頁 97-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野原将揮	4. 巻 -
2. 論文標題 《漢簡語彙考證》訂補 (四) : 訊	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 簡帛網	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 12件）

1. 発表者名 秋谷裕幸、野原将揮
2. 発表標題 びん語中来自*m.r和*ng.r的来母字：兼論原始びん語在漢語史上的位置
3. 学会等名 語言学前沿与漢語史研究講論（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 淺談上古音*-r-：以《安大簡》的通假為例
3. 学会等名 舊語新知：古代經典的語言新釋（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 淺談“非”的上古音及相關問題
3. 学会等名 第六屆重建原始びん語及其相關問題工作坊（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 《漢簡語彙考證》訂補（四） “訊”
3. 学会等名 戰國秦漢簡牘在線研讀會（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 稻の上古音
3. 学会等名 漢語史研究における語彙論と音韻論
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nohara Masaki
2. 発表標題 The Phonetic Loans in “An Da Jian”
3. 学会等名 Recent advances in the study of Chinese rhyming practices in excavated documents, SOAS, University of London (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 研究上古音：證據與蓋然性～以“少”字為例～
3. 学会等名 第十八屆國際暨第三十八屆全國聲韻學學術研討會 證實與擬測 漢語音韻的歷史研究，東吳大學（台灣）（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nohara Masaki
2. 発表標題 The reconstruction of the word ‘egg’ in Old Chinese
3. 学会等名 The 52nd International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (ICSTLL52), Sydney, University of Sydney (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nohara Masaki
2. 発表標題 The reconstruction of the word Quan2 “spring, source”: *dzan
3. 学会等名 漢字音訳・上古音研究会（東洋文庫）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 上古音研究：証拠と蓋然性
3. 学会等名 シンポジウム「漢語史研究における動態的観点と静態的観点」（宮崎大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nohara Masaki
2. 発表標題 Applying the comparative method to reconstruct some basic words in Old Chinese
3. 学会等名 Recent Advances in Comparative Linguistic Reconstruction, SOAS, University of London（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 構擬“泉”字音 兼論“同義換讀”
3. 学会等名 The 2nd LFK society Young Scholars Symposium, Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 OC forum
3. 学会等名 The 2nd LFK society Young Scholars Symposium, Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 上古音について
3. 学会等名 古代漢字音訳資料研究会(第1回)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野原将揮
2. 発表標題 稻の上古音に関する初歩的研究
3. 学会等名 漢語史研究における語彙論と音韻論 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野原将揮・秋谷裕幸
2. 発表標題 一个表示 { YUAN } 的詞族
3. 学会等名 日本中国語学会関西支部例会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 千田大介 小島浩之編（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 好文出版	5. 総ページ数 63
3. 書名 デジタル時代の中国学リファレンスマニュアル	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Workshop: Chinese languages and its surroundings	開催年 2022年～2022年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
スイス	チューリッヒ大学		